

● フィオードロワ・アナスタシア 特定准教授

Anastasia FEDOROVA (Associate Professor)

研究課題：1950年代の日本映画と民主主義

(Japanese Film and Democracy in the 1950s)

専門分野：映画学、戦後日本史 (Film Studies, Postwar Japanese History)

受入先部局：文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名：ロシア国立研究大学高等経済学院 (HSE University)



私の専門は映画学で、19世紀末におけるその発明以来、人々の生活と思考に多大な影響を及ぼしてきた「映画」の歴史と理論を研究対象としています。単著『リアリズムの幻想：日ソ映画交流史 1925-1955』(森話社、2018年)では、日本とソビエト・ロシアにおける文化交流の歴史に焦点をあて、映画を介した両国の対話が「リアリズム」という概念を中心に進められてきた事実を明らかにしました。こうした研究を進めるなかで、新たに芽生えたのが、1950年代の日本映画と「民主主義」の宣伝・浸透をめぐる関心です。ポツダム宣言の受託から1955年前後までの十年間は、様々な混乱と変化を伴うダイナミックな時代であり、「民主主義」を含むあらゆる概念や現象をめぐって、相反する解釈が飛び交い、その妥当性と影響力を争い合っていました。1950年代に作られた映画テクストを多角的に考察することで、現代の日本社会にも受け継がれている「民主的な」政治や教育、そして生活様式に対する共通認識の確立を映画が支えてきた過程を紐解いていきます。

My research and teaching focus is on Japanese film and media. In my dissertation, which was later published as the monograph, *Illusion of Realism: History of Soviet-Japanese Cinematic Interactions, 1925-1955* (Tokyo: Shinwasha, 2018), I present the concept of realism as a recurrent concern and the chief motivating force behind the interactions between Soviet and Japanese filmmakers, critics, and audiences. At Hakubi, I plan to extend my work on the 1950s, highlighting the decade as a transitional yet crucial moment in Japanese history, wherein different visions of the country's future emerged and were negotiated by and through media. Issues of democracy (*minshu-shugi*) were among the ones most frequently discussed during this period. Film as a mass medium was manufactured and consumed "collectively," and served as a space in which the role of the "common people" in the reconstruction of post-war Japan was debated. In my project, I hope to reach a more profound understanding of Japan's complicated relationship with the concept and practice of "democracy" (i.e., people's rule) through the study of independent "message films" and comedies that exhibit the early Cold War's ideologies and politics.

占領期の映画政策とその研究

終戦とともに、日本は連合国軍の占領下に置かれ、人々の生活と価値観は大きく変容します。アメリカを中心とした占領政策は、軍国主義と封建主義の排除、「民主主義」に基づく社会秩序の再建を目指すものでした。大衆娯楽の王者として絶大な人気と影響力を保持していた映画は、新たな政治的理想的を宣伝するのに最適なツールとして、一翼を担います。GHQの下部組織であったCIE（民間情報教育局）は、日本の映画会社に対して「製作が奨励されるべき映画」10項目、「製作を禁止すべき映画の内容」13項目を具体的に提示し、日本側が打ち出す企画に対して事前審査を行い

ました。完成したフィルムはさらに、CCD（民間検閲支隊）による2度目の検閲を受けることになっていて、その実態はこれまでにも、CIEとの度重なる意見の対立、冷戦の深刻化に伴う検閲方針の変化と共に、日本国内外の専門家による画期的な研究の対象となっていました。

戦後メインストリームの起源に迫る—1950年代の日本映画と「民主主義」をめぐる多様な解釈

戦後の日本映画が歩んできた道のりを正しく理解するためには必要な学術的土台を築いてきたこれまでの研

究は、占領軍の掲げる映画政策を詳細に記したアーカイヴ資料や、GHQからの全面的な支持を得て製作された「アイデア映画」の製作・受容に着眼点を置くものでした。日本映画の巨匠とされる一部の監督たちによって製作され、『キネマ旬報』のベストテン等で高評価を与えられたこれらの作品は、当時の観客に対して、どれ程のインパクトを發揮できたのでしょうか。近年では、占領期に対する従来の研究が、GHQによる政策の影響力を重視するあまり、終戦後の映画界を支えてきた「より大きな存在」としてのB級映画、ジャンル映画等を見落しがちであったと指摘する論考も現れています。終戦後の日本で量産され、観客からの人気を集めている喜劇映画には、「占領政策との直接的な関連性」を見出すことが困難な作品も少なくありません。終戦と占領が日本社会にもたらした様々な変化、それらを宣伝・浸透させるにあたって映画が担っていた役割を解明するには、占領軍が進めてきた政策を分析するだけでは不十分です。

連合国軍による占領政策の基本方針として掲げられていた「民主主義」の育成と、戦後日本の政治・文化を論じる際に必ず言及される「民主主義」の概念には、果たして同等の意味が込められていたのでしょうか。政治における五五年体制や、映画界における五社協定が成立されるまでの日本社会は極めて流動的であり、「民主主義」に対する共通の認識も、まだ本格的には定まっていませんでした。様々な発展の可能性が溢れていた当時、人々の政治参加や発言の自由をめぐる多様な意見が飛び交い、その妥当性と影響力を争い合っていました。冷戦期のイデオロギー対立が生み出した「民主主義」への相反する解釈は、無数の衝突と歩み寄りを繰り返し、徐々に单一民族、単一言語思想、象徴天皇制と科学技術の発展を基調とする戦後のメインストリームへと統合されていきます。1940年代後半から1950年代半ばに作られた日本映画は、こうした戦後社会におけるイデオロギー交渉(negotiation)のプロセスを端的に物語っています。

本研究では、これまでの映画学において注目されることが少なかった、1950年代初頭の独立プロ映画や、戦後の変革を風刺する大衆喜劇、より民主的な政治参加と社会統治を提唱する記録映画を重点的に扱うことで、様々なイデオロギー的矛盾が前景化してきた「第

一の戦後」とも呼ばれる時代に対して、よりバランスのとれた、包括的な理解の確立を目指します。なかでも特に注目したいのは、過去に起きた事件を「正確に再現」しようと試みてきた1950年代の映画テクストです。歴史の当事者に「発言権」を与えることに意欲的だった国民的歴史学運動と戦後日本における映画作りの関係も明らかにしていきたいと考えています。



図1：『アサヒグラフ』1949年4月20日号で「瓜二つ」として紹介された二人の映画女優、岸旗江と原節子。

東宝ニューフェイス第1期生として、1947年にデビューを果たした岸旗江をめぐる言説のなかで、繰り返し強調されたのは、その庶民的な性格と、プロレタリアな経験、そして東宝きっての大スターである原節子との「そっくりな」外見です。戦後初期の日本で左翼的な思想を視覚化していたはずの岸旗江が、その独自な魅力を最大限に發揮出来たのは、原節子という支配的イデオロギーを象徴するスターとの比較を通してでした。図1は、そのような戦後初期の映画界を取り巻いていた複雑なイデオロギー的環境を映し出すシンボリックな一枚の写真です。

参考文献：

- フィオードロワ・アナスタシア「岸旗江という女優－その売り出し方にみる1950年代《独立プロ映画》のイメージ戦略」『人文学報』116号、pp.53-67.2021.
 フёдорова А.А. Гробница для царя и для народа: документальный фильм о раскопках кургана Цуки-но-ва (1953–1954). [帝王と人民の墓：月の輪古墳の発掘（1953-1954）及びその記録映像]（ロシア語）Проблемы Дальнего Востока. № 6. pp. 167-181. 2021.12.
 フィオードロワ・アナスタシア『リアリズムの幻想：日ソ映画交流史[1925-1955]』森話社、2018年.